

高齢者の事故防止等に関するアンケート調査
報告書

消費者庁新未来創造戦略本部

令和6年4月

目 次

1. はじめに	1
2. ネットアンケート調査の概要	2
(1) 調査方法	2
(2) 回答者の基本情報	3
3. ネットアンケート調査結果	6
(1) 75歳以上の要介護者の身体の状況（複数回答可）	6
(2) 日常生活において、けがをした、またはしそうになった経験（複数回答可）	7
(3) けがをしたり、しそうになったときの結果（それぞれ複数選択可）	15
(4) 転倒したり、しそうになったときの状況（複数選択可）	18
(5) デイサービス利用において、けがをした、またはしそうになった経験（複数選択可） ..	19
(6) デイサービス利用中のけが等を知ったきっかけ	20
(7) 通院や入院が必要となった事故に関する具体的な事例（自由回答）	21
4. ヒアリング調査の概要	22
5. ヒアリング調査の結果	22
(1) 転倒について	22
(2) 食事について	23
(3) その他	23
6. 調査結果のまとめ	24
(1) 屋内外でのけが経験について	24
(2) けが経験の状況について	26
(3) デイサービスについて	27
7. おわりに	27

1. はじめに

令和5年版高齢社会白書¹によると、令和4年10月1日現在の我が国の65歳以上人口は3624万人となり、総人口に占める割合（高齢化率）は29.0%である。今後も65歳以上人口は増加傾向が続くとされる。

平成30年度、消費者庁が厚生労働省「人口動態調査」の調査票情報を基に行った分析²では、交通事故、自然災害を除く不慮の事故で死亡した総死者（2.7万人）のうち、高齢者の割合は8割以上となっており、増加傾向にあることが示されている。

また、東京消防庁の救急搬送データ³によると、救急搬送の半数以上は高齢者であり、平成29年から令和3年までの5年間に39万人以上の高齢者が、日常生活中の事故により救急車で医療機関へ搬送されている。初診時程度別では、4割以上が入院の必要がある中等症以上と診断されており、その割合は、高齢になるにつれて増加していることも記されている。

そのほか、令和3年度介護保険事業状況報告⁴によると、要介護認定者数も年々増加しており（図1）、高齢者をはじめ、誰もが健康で安全かつ安心して暮らせる社会であることが求められている。

以上のような状況を踏まえ、新未来創造戦略本部では、高齢者の事故、特に家庭や介護施設等での消費者事故の特徴をより明確に調査し、注意喚起その他必要な措置等の検討に資する基礎資料とする目的として本調査を行った。

具体的には、75歳以上でかつ要介護認定（1～3）を受けている方（以下「75歳以上の要介護者」という。）と同居しているまたはしていた者を対象として、家庭内及び、通所介護（以下「デイサービス」という。）利用中の事故の発生状況について、インターネットアンケート（以下「ネットアンケート」という。）調査を実施した⁵。さらに、実際の要介護認定を受けた高齢者の日常生活について知見を持つ一般社団法人徳島県介護支援専門員協会の協力を得てヒアリング調査を実施した。

¹ 内閣府「令和5年版高齢社会白書」https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/html/gaiyou/s1_1.html（令和5年12月26日最終閲覧）

² 消費者庁「高齢者の事故の状況について—「人口動態調査」調査票情報及び「救急搬送データ」分析—」https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_safety/caution/caution_009/pdf/caution_009_180912_0002.pdf（令和5年12月26日最終閲覧）

³ 東京消防庁「救急搬送データからみる高齢者の事故～日常生活での高齢者の事故を防ぐために～」<https://www.tfd.metro.tokyo.lg.jp/lfe/topics/nichijou/kkhansoudeta.html>（令和5年12月26日最終閲覧）

⁴ 厚生労働省「令和3年度 介護保険事業状況報告（年報）

<https://www.mhlw.go.jp/topics/kaigo/osirase/jigyo/21/index.html>（令和5年12月26日最終閲覧）

⁵ 消費者庁新未来創造戦略本部では、令和4年度に「住環境における高齢者の安全等に関する調査」を実施し、高齢者自身が経験した住環境での事故や事故防止対策、意識等について、インターネットアンケート及び消費者協会調査（アンケート及びヒアリング）を行い、報告書を公表している（https://www.caa.go.jp/policies/future/project/project_012/）（令和5年12月26日最終閲覧）。

なお、当該調査では、ネットアンケートでの調査対象者を65歳以上かつ同じ住宅に10年以上居住している者に絞った調査であったことや高齢者本人から事故の情報を回収するという調査手法であったこと等から、自宅だけがをした・しそうになった経験がある回答が全体的に少ない結果となるなど、異なる実態把握の必要性が求められていたところである。



図1 要介護（要支援）認定者数の推移（各年度末現在）

2. ネットアンケート調査の概要

（1）調査方法

医療機関の受診に至らない方がを含め、高齢者の方がの経験等を把握するため、75歳以上の要介護者と同居している者を対象としたネットアンケート調査を実施した。調査概要については、表1のとおりである。

表1 調査概要（ネットアンケート）

調査期間	令和5年10月31日（火）～令和5年11月14日（火）
調査対象者	過去2年間において、75歳以上かつ要介護認定（1～3） ⁶ を受けている方と同居または、同居していた者
回答者数	1,000人 ※回答者数は1,000人だが、回答者に75歳以上の要介護者ごと（2名まで）に回答を得たため、回答数が1,051となっている設問がある。
割り付け	居住地域（東京23区または政令指定都市 ⁷ ・中核市 ⁸ ・それ以外の都市の3カテゴリー）にて均等に割り付け

⁶ 要介護度4、5については、全面的な介護が必要となることが想定され、日常生活の経験を聞くにはふさわしくないと考え、調査対象から外している。

⁷ 札幌市、仙台市、さいたま市、千葉市、横浜市、川崎市、相模原市、新潟市、静岡市、浜松市、名古屋市、京都市、大阪市、堺市、神戸市、岡山市、広島市、北九州市、福岡市、熊本市

⁸ 函館市、旭川市、青森市、八戸市、盛岡市、秋田市、山形市、福島市、郡山市、いわき市、水戸市、宇都宮市、前橋市、高崎市、川越市、川口市、越谷市、船橋市、柏市、八王子市、横須賀市、富山市、金沢市、福井市、甲府市、長野市、松本市、岐阜市、豊橋市、岡崎市、一宮市、豊田市、大津市、豊中市、吹田市、高槻市、枚方市、八尾市、寝屋川市、東大阪市、姫路市、尼崎市、明石市、西宮市、奈良市、和歌山市、鳥取市、松江市、倉敷市、吳市、福山市、下関市、高松市、松山市、高知市、久留米市、長崎市、佐世保市、大分市、宮崎市、鹿児島市、那覇市

なお、高齢者の中でも、厚生労働省の「高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施に関する有識者会議」⁹において、後期高齢者（75歳以上）については、複数の慢性疾患の罹患に加え、要介護状態に至る前段階であっても身体的な脆弱性のみならず、精神・心理的な脆弱性や社会的な脆弱性といった多様な課題と不安を抱えやすく、いわゆるフレイル¹⁰状態になりやすい傾向にあるとの指摘があることに加え、令和5年版高齢社会白書¹¹によれば、75歳以上になると要介護の認定を受ける人の割合が大きく上昇することから、ネットアンケートの調査対象の年齢は75歳以上に限定した。

（2）回答者の基本情報

ネットアンケート回答者の基本情報の概要は、以下のとおりであった。

① 性別

回答者の性別は、男性65.2%、女性34.7%、その他・回答しない0.1%であった（図2）。

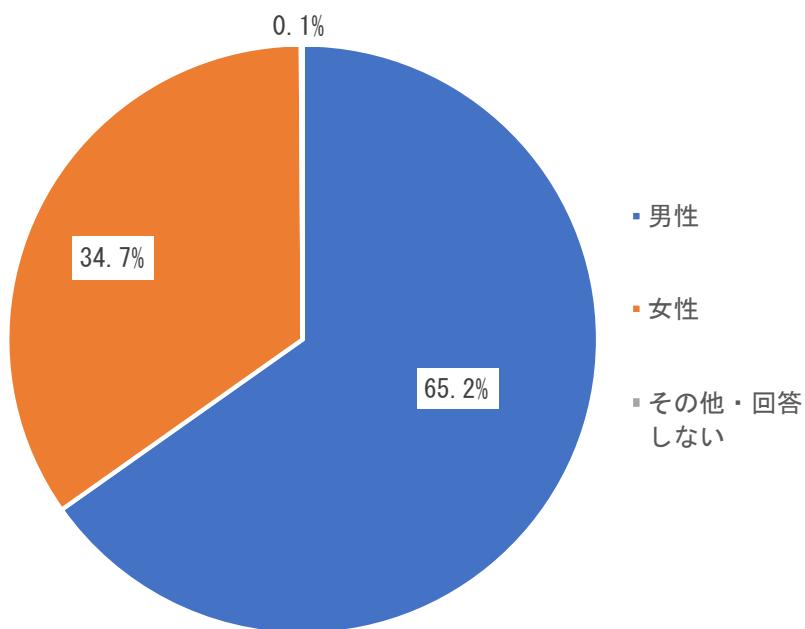


図2 回答者の性別【n=1000】

⁹厚生労働省「高齢者の保健事業と介護予防の一体的な実施に関する有識者会議報告書」（平成30年12月3日）

<https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/000495224.pdf>（令和6年2月9日最終閲覧）

¹⁰「フレイル」は、『フレイル診療ガイド 2018年版』（日本老年医学会／国立長寿医療研究センター、平成30年）によると、要介護状態に至る前段階として位置づけられるが、身体的脆弱性のみならず精神心理的脆弱性や社会的脆弱性などの多面的な問題を抱えやすく、自立障害や死亡を含む健康障害を招きやすいハイリスク状態を意味するとされている。

¹¹内閣府「令和5年版高齢社会白書」

https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2023/html/zenbun/s1_2_2.html（令和5年12月26日最終閲覧）

② 年齢

回答者の年齢は 60 代が最も多く (39.7%) 次いで 50 代が多かった (32.6%) (図 3)。

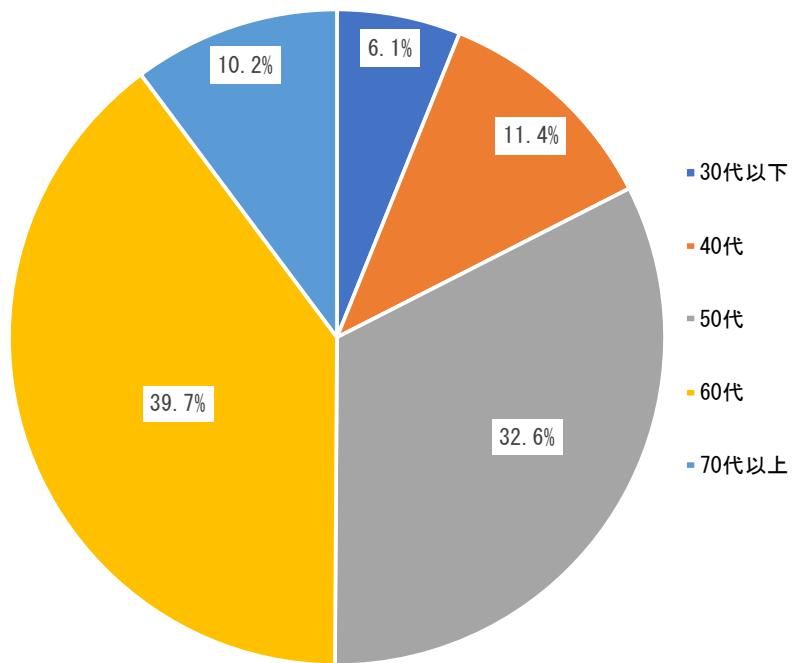


図 3 回答者の年齢 [n=1000]

③ 回答者と同居している、または同居していた 75 歳以上の要介護者の性別

回答者と同居している、または同居していた 75 歳以上の要介護者は 1,051 人で、そのうち男性が 31.4%、女性が 68.6% であった (図 4)。

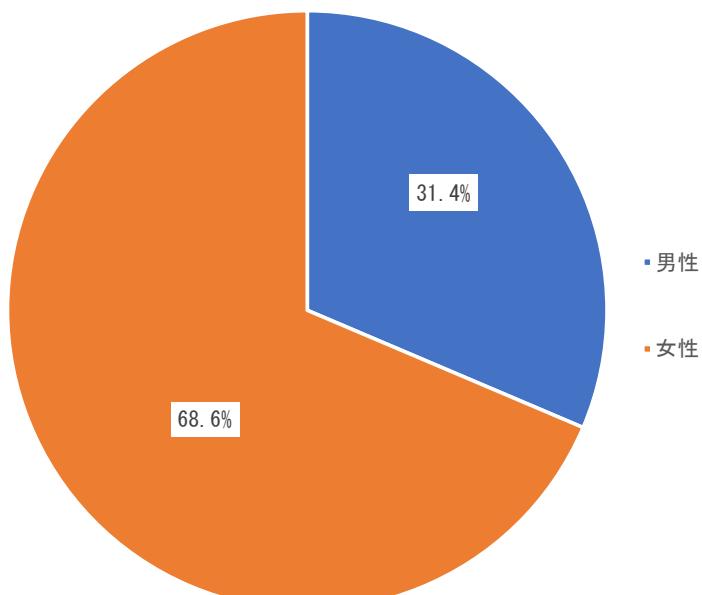


図 4 75 歳以上の要介護者の性別 [n=1051]

④ 回答者と同居している、または同居していた 75 歳以上の要介護者の年齢

回答者と同居している、または同居していた要介護者の年齢で最も多かったのは、90 歳～94 歳 (327 人) で、次いで多いのは 85 歳～89 歳 (316 人) であった(図 5)。

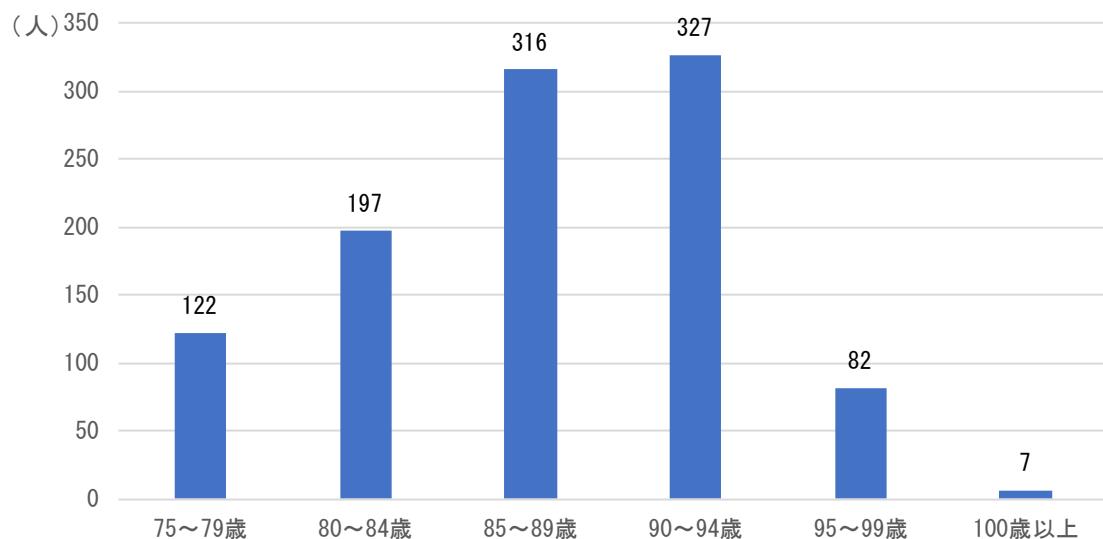


図 5 75 歳以上の要介護者の年齢 【n=1051】

⑤ 回答者と同居している、または同居していた 75 歳以上の要介護者の要介護度

回答者と同居している、または同居していた 75 歳以上の要介護者の要介護度で最も多かったのは、要介護度 2 の 37.0% で、次いで要介護度 1 の 35.6% であった(図 6)。

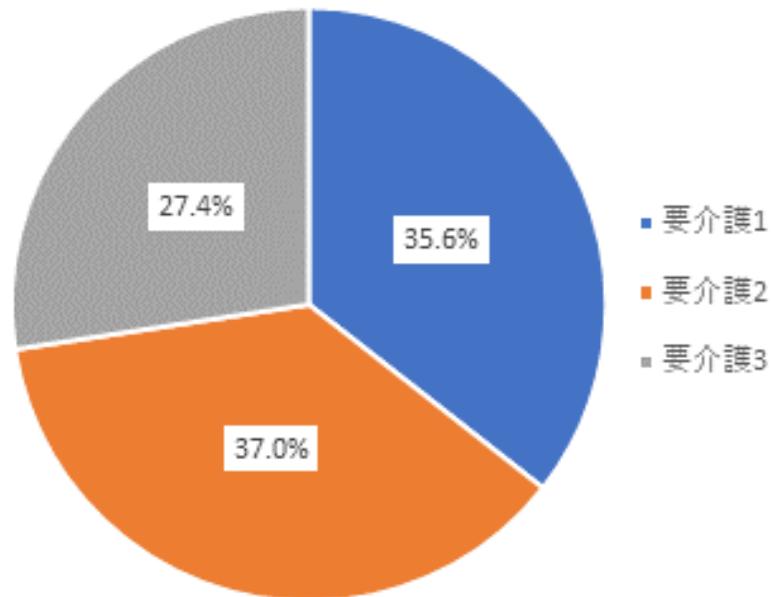


図 6 75 歳以上の要介護者の要介護度 【n=1051】

⑥ 回答者と同居している、または同居していた 75 歳以上の要介護者のデイサービスの利用回数（1 週間あたり）

回答者と同居している、または同居していた 75 歳以上の要介護者のデイサービス利用回数で最も多かったのは、週 1 回以上利用している者の中では、週 2 回（252 人）であり、次いで週 3 回（205 人）であった（図 7）。

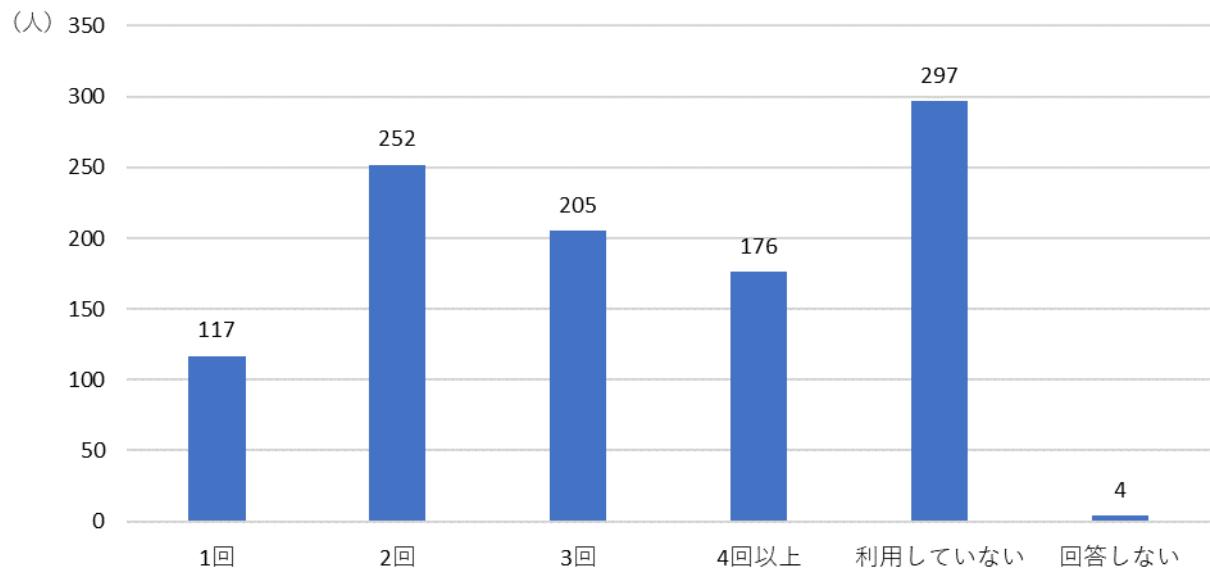


図 7 通所介護（デイサービス）の利用回数（1 週間あたり）【n=1051】

3. ネットアンケート調査結果

（1）75 歳以上の要介護者の身体の状況（複数回答可）

「立ち上がりや歩行が不安定で、何らかの支えを必要とする」（74.2%）が最も多く、次いで、「排せつや入浴などにおいて、一人では難しく、家族等の手助けを必要とする」（44.3%）が多かった（図 8）。

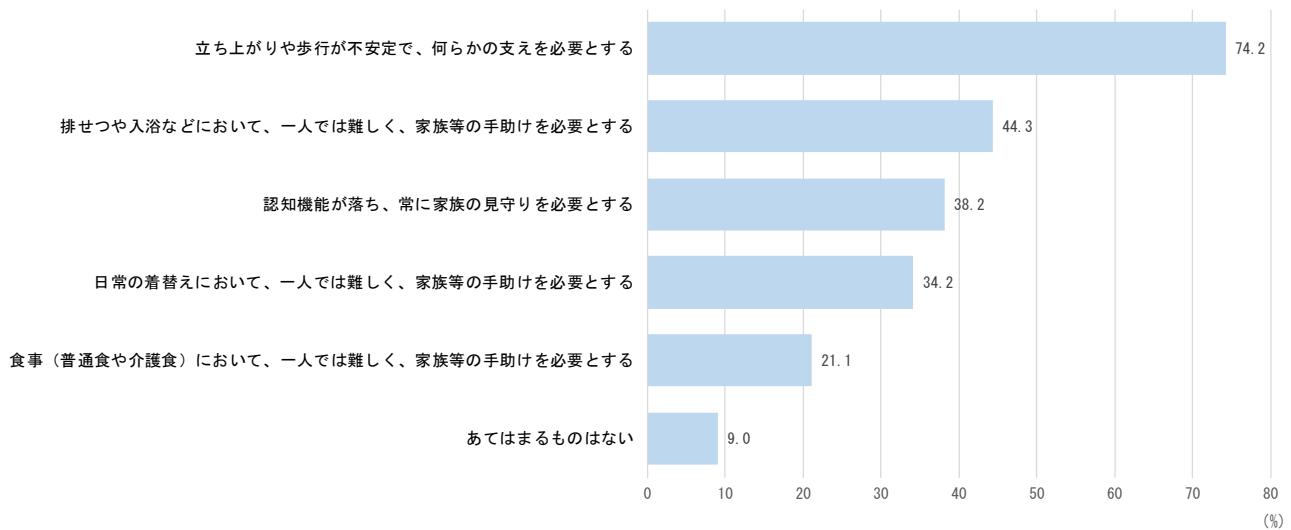


図 8 75 歳以上の要介護者の身体の状況【n=1051】

(2) 日常生活において、けがをした、またはしそうになった経験(複数回答可)

① 居間

居間において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多かったのは、つまずく、転ぶ、よろめく(46.2%)であった(図9)。

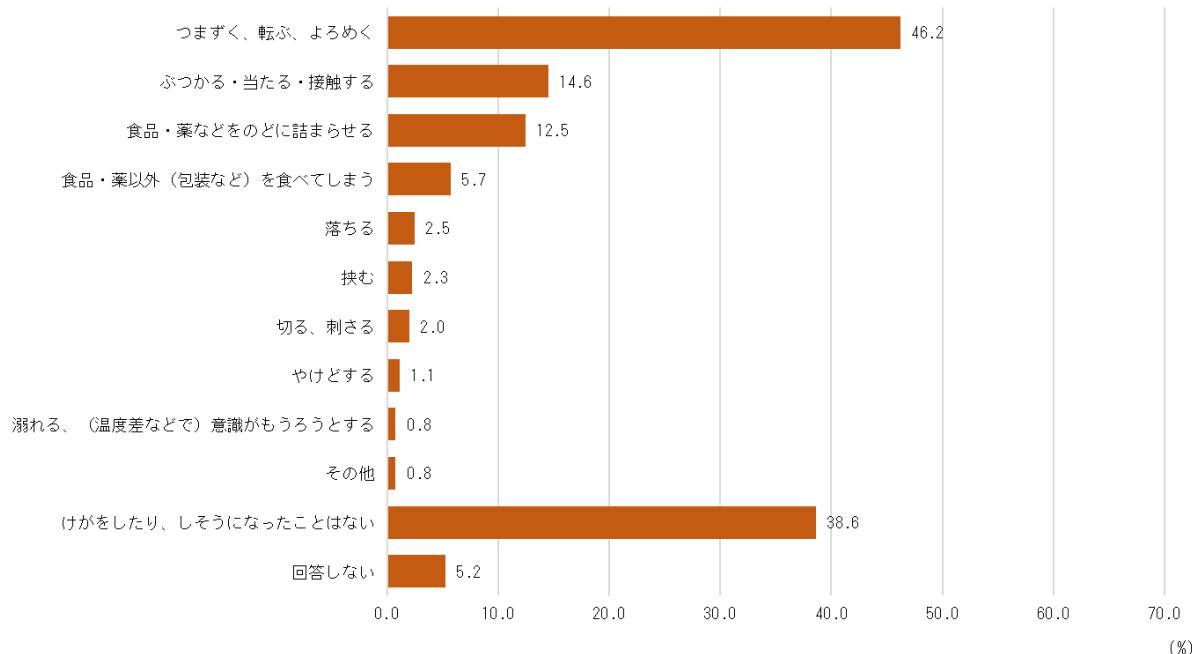


図9 居間においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

② 寝室

寝室において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多かったのは、つまずく、転ぶ、よろめく(42.3%)であった(図10)。

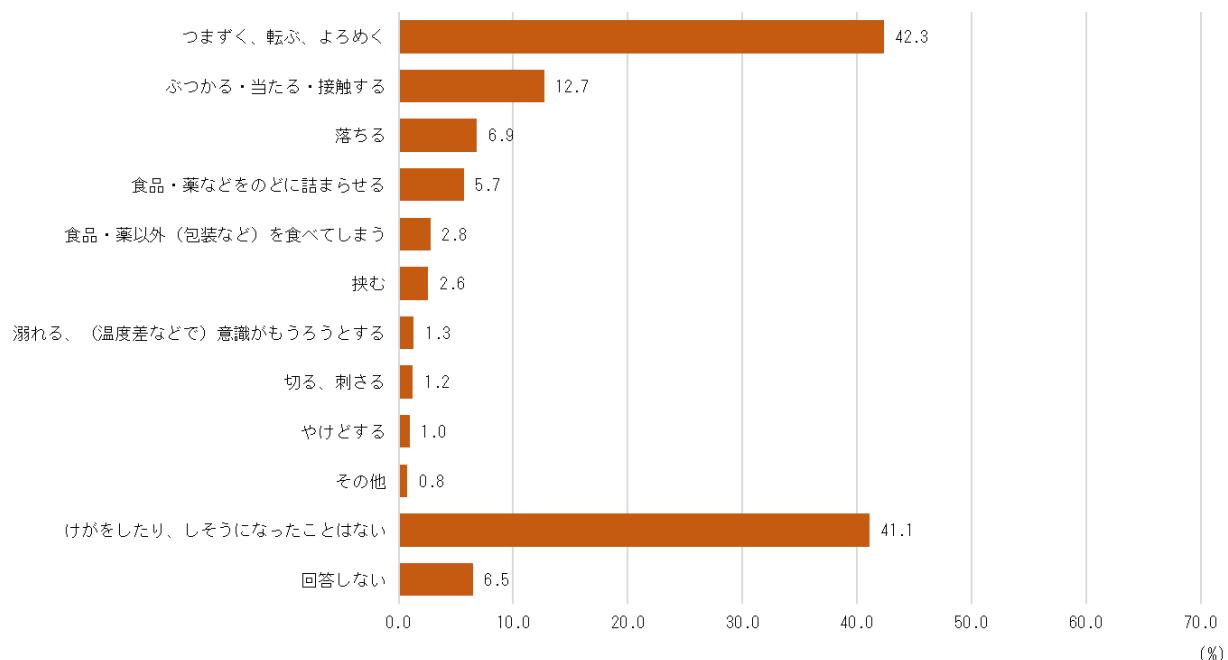


図10 寝室においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

③ 台所・食堂

台所・食堂において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(27.5%)であった(図11)。

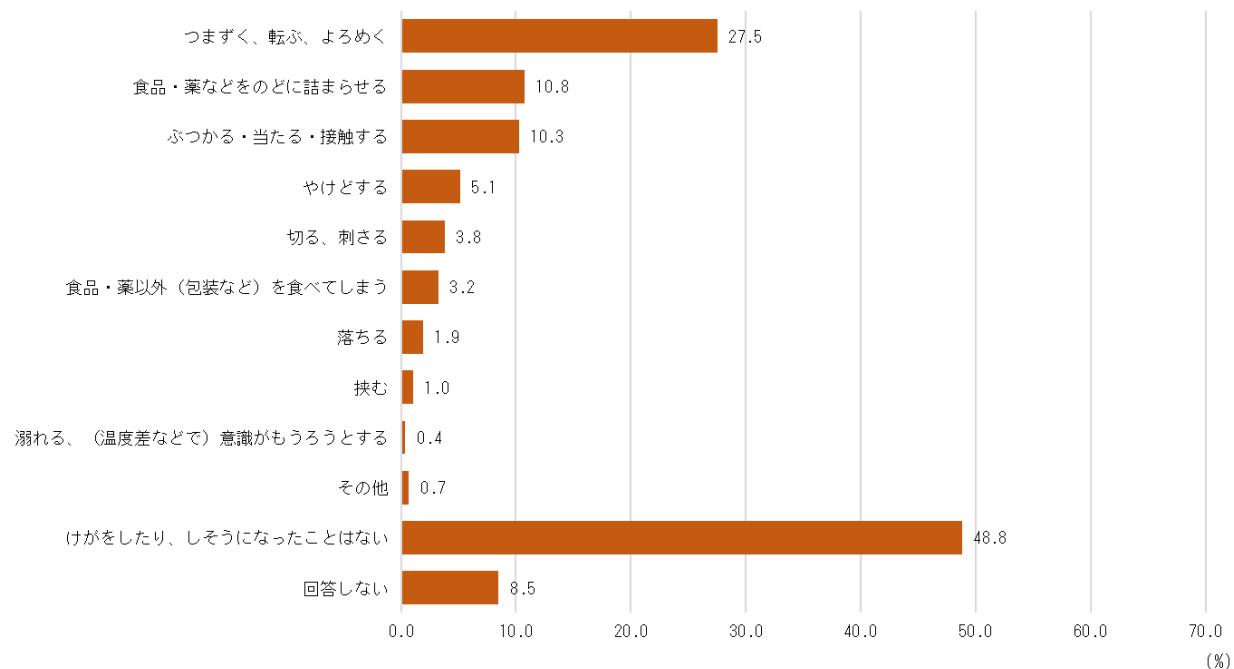


図11 台所・食堂においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

④ 洗面所

洗面所において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(26.3%)であった(図12)。

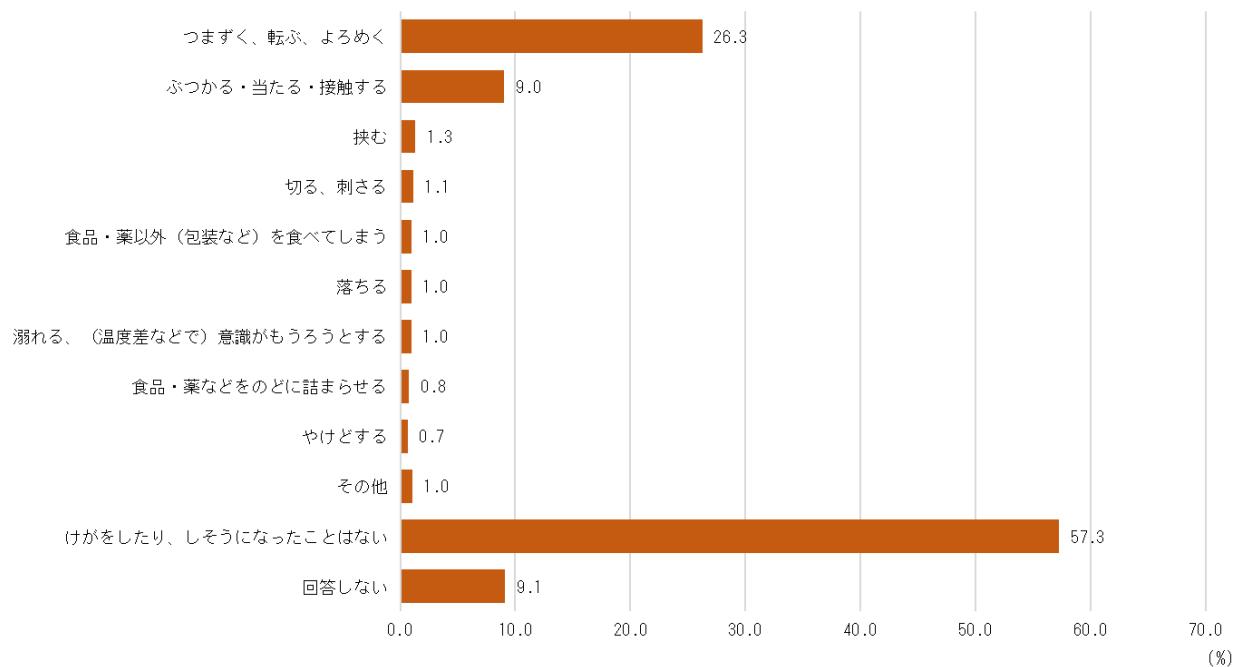


図12 洗面所においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑤ 風呂場

風呂場において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(32.4%)であった(図13)。

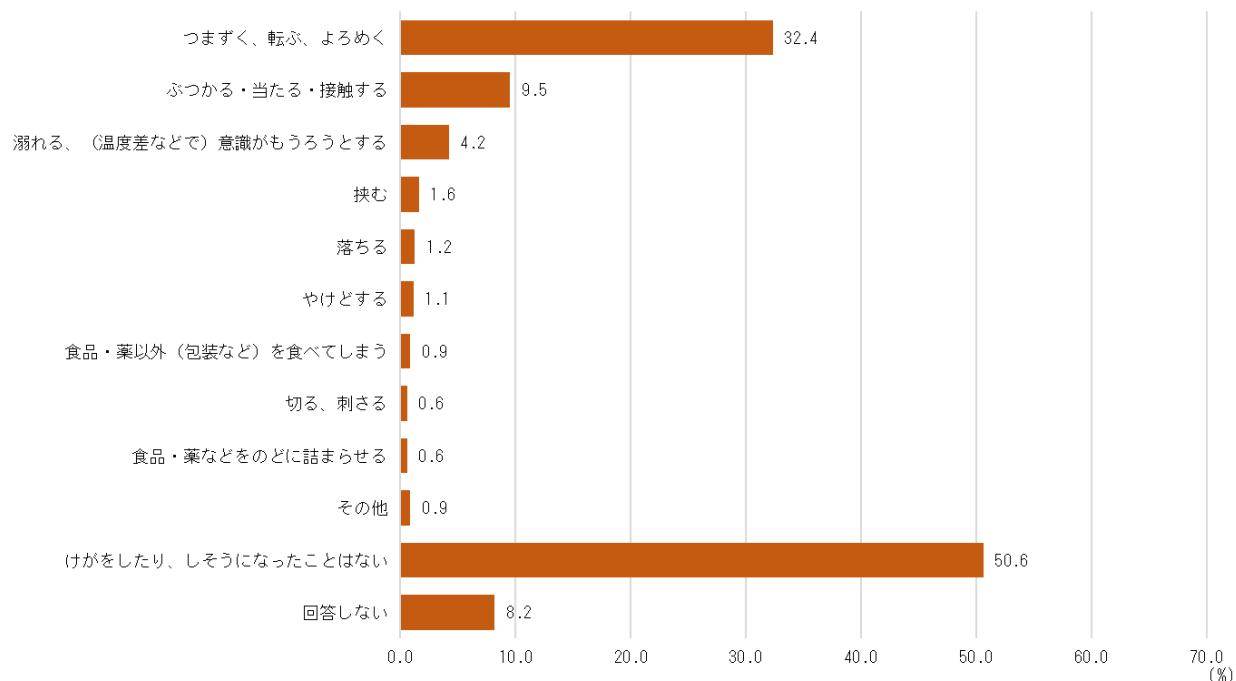


図13 風呂場においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑥ 玄関

玄関において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(39.7%)であった(図14)。

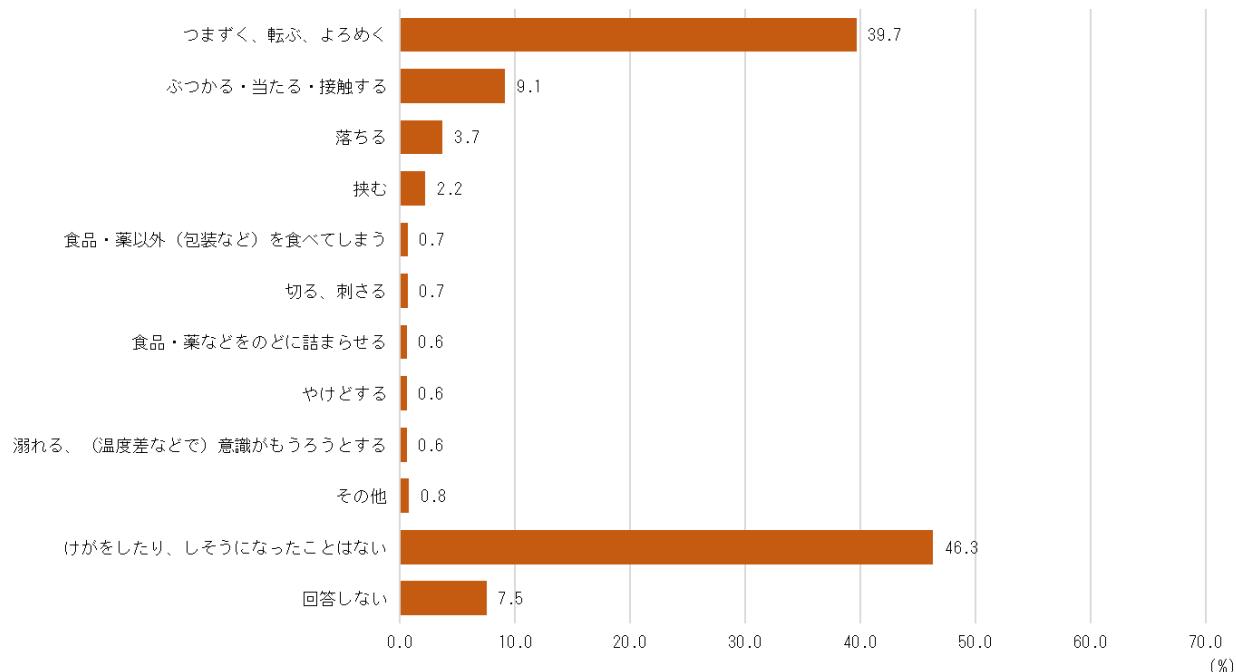


図14 玄関においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑦ 階段(屋内において)

階段において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(25.6%)であった(図 15)。

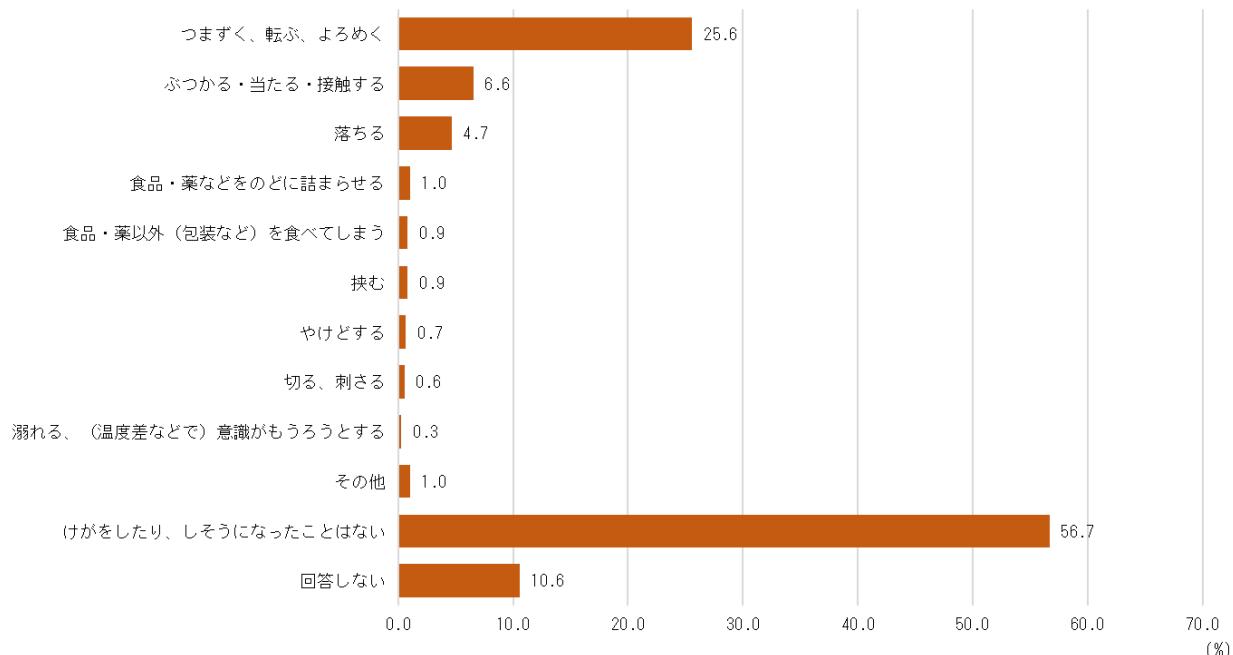


図 15 階段(屋内)においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑧ トイレ

トイレにおいて、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(30.6%)であった(図 16)。

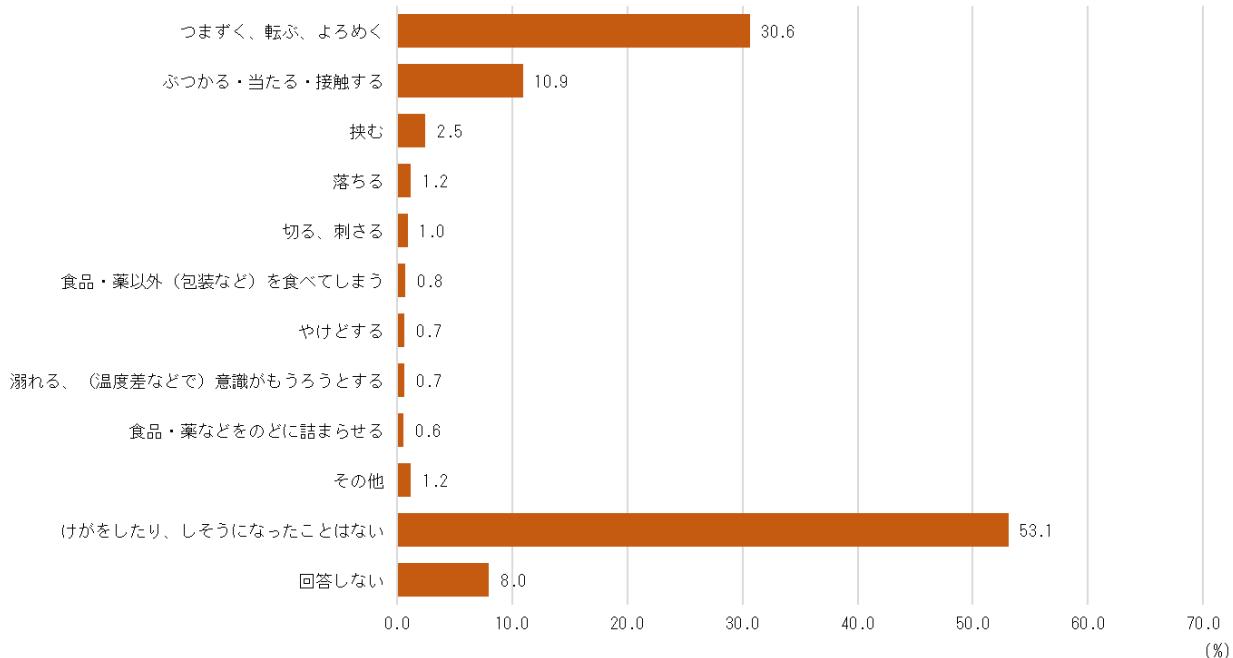


図 16 トイレにおいてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑨廊下

廊下において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(40.8%)であった(図17)。

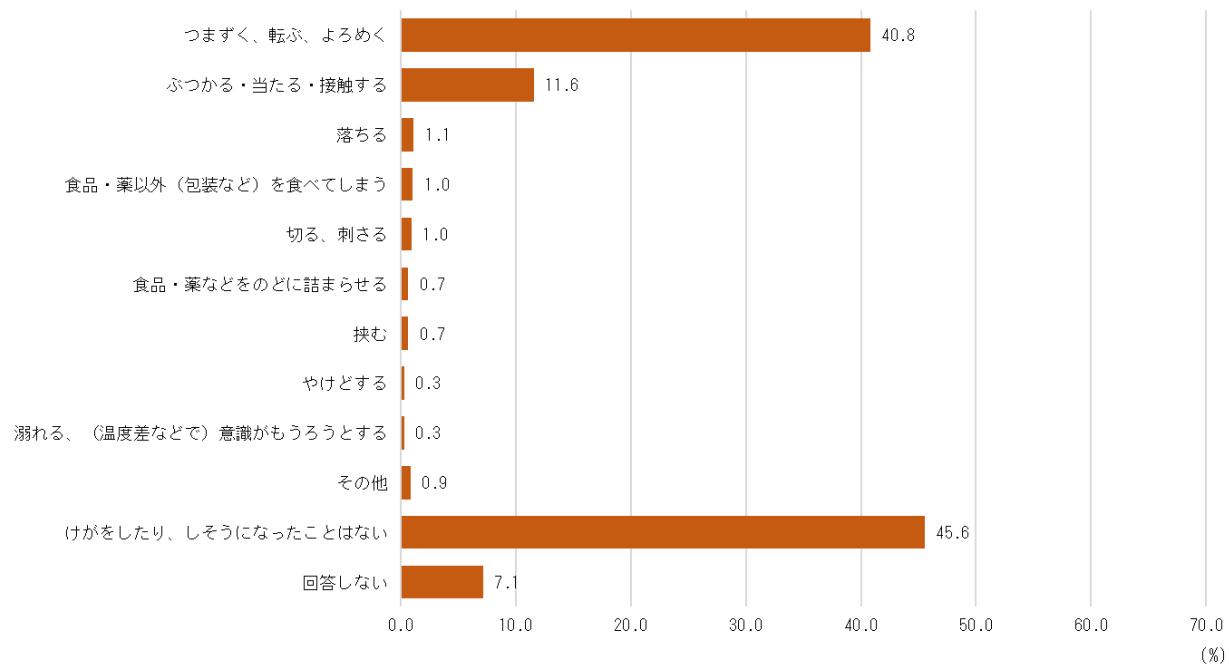


図17 廊下においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑩自宅の庭

自宅の庭において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(29.0%)であった(図18)。

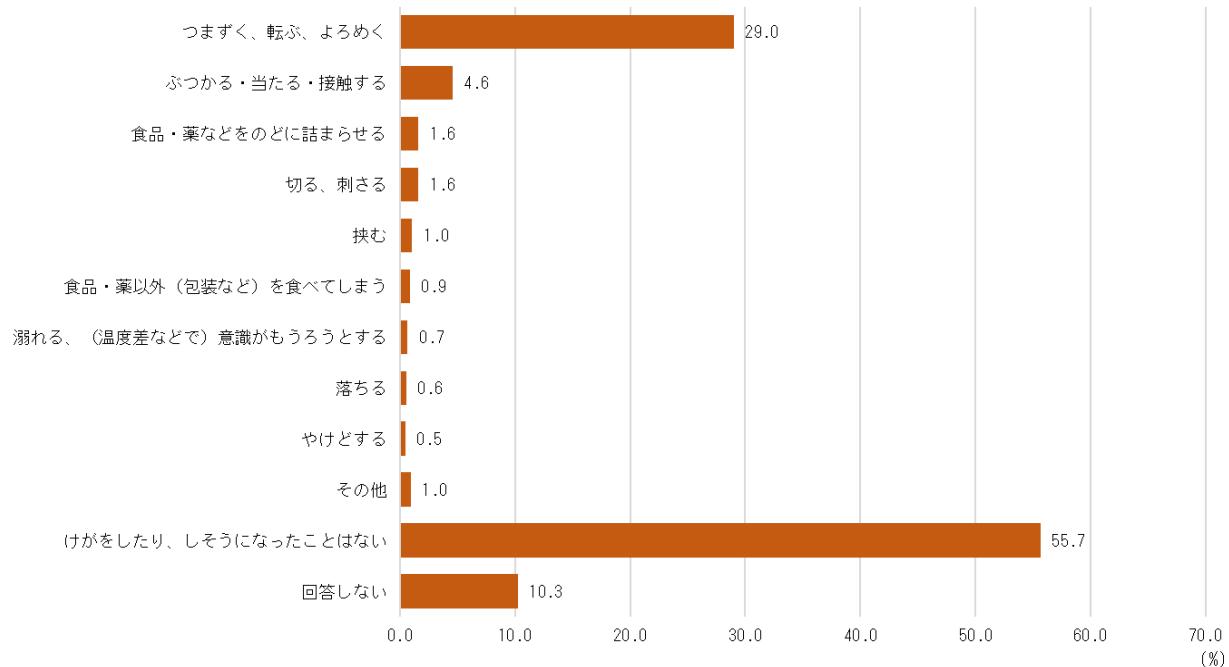


図18 自宅の庭においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑪ 公園

公園において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(16.2%)であった(図 19)。

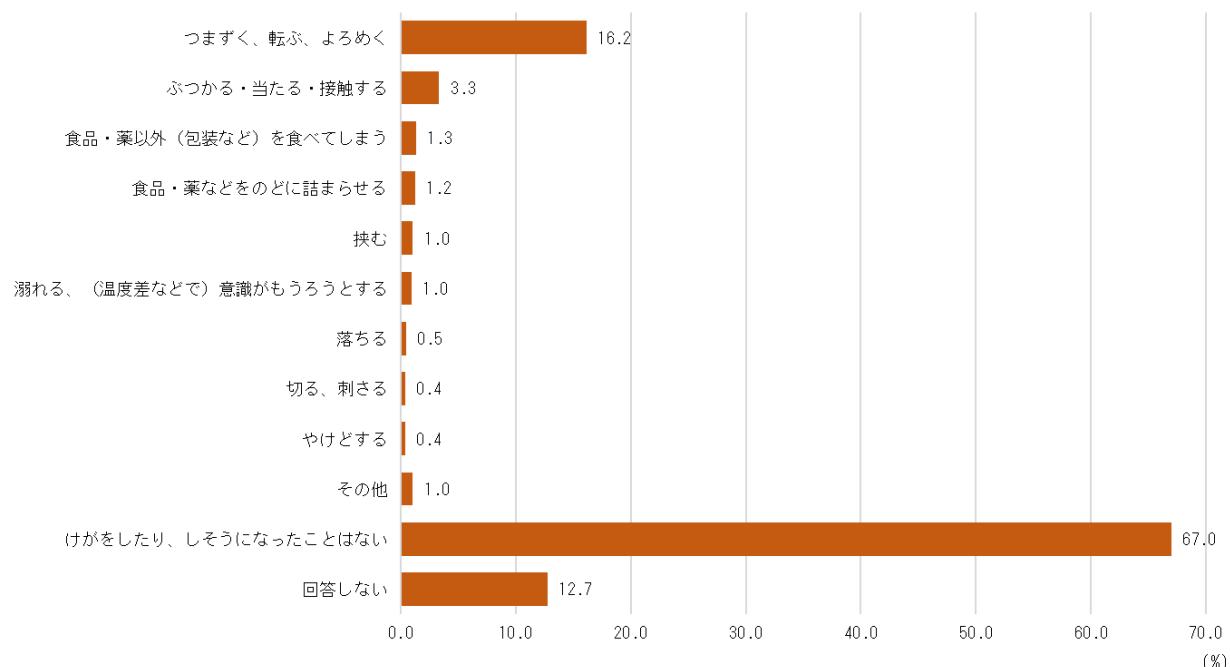


図 19 公園においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑫ 道路

道路において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(39.0%)であった(図 20)。

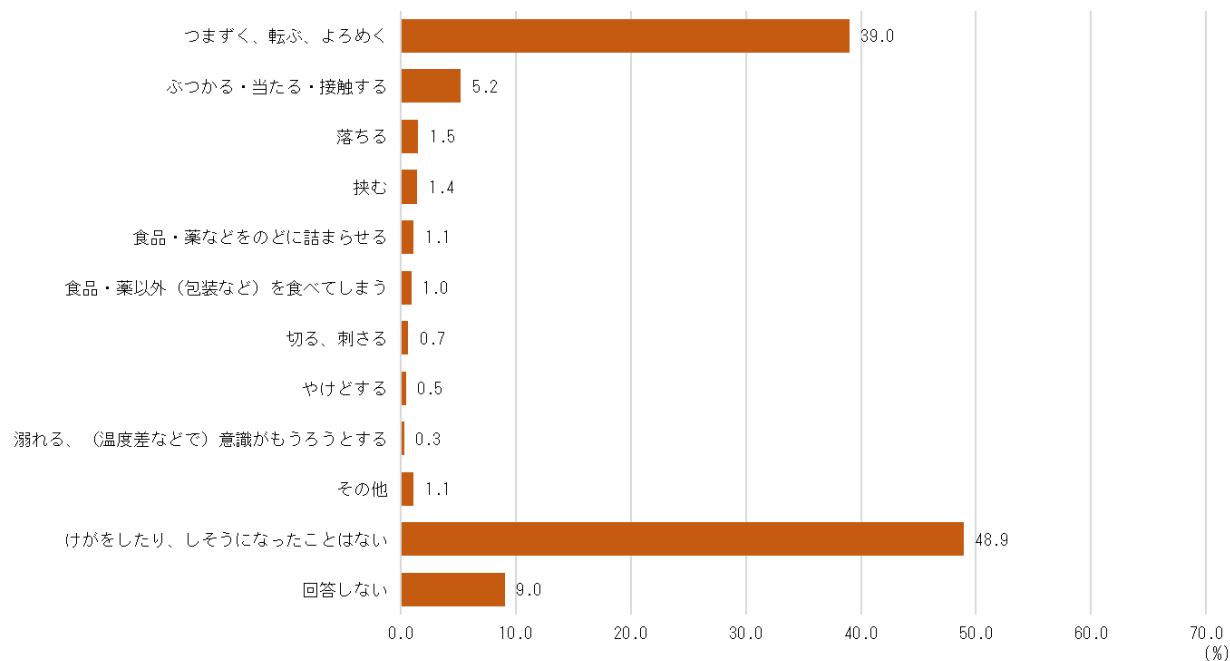


図 20 道路においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑬ 階段(屋外において)

階段(屋外)において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(28.2%)であった(図21)。

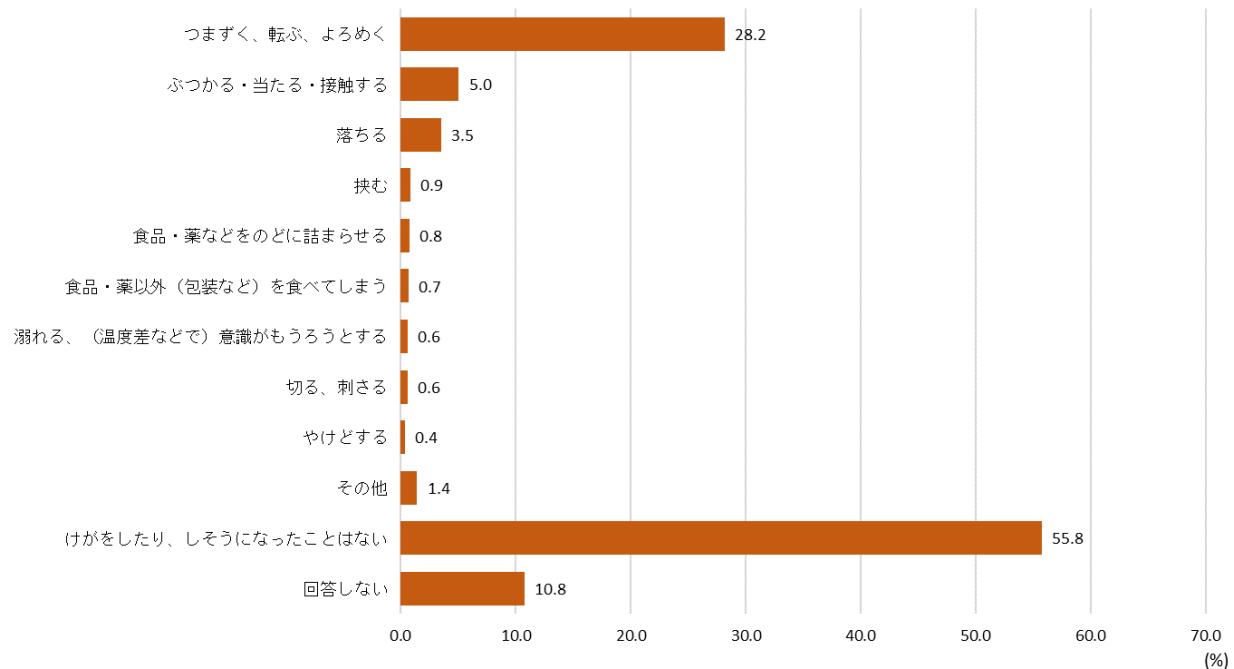


図21 階段(屋外)においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑭ 公共交通機関利用時

公共交通機関利用時において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(18.3%)であった(図22)。

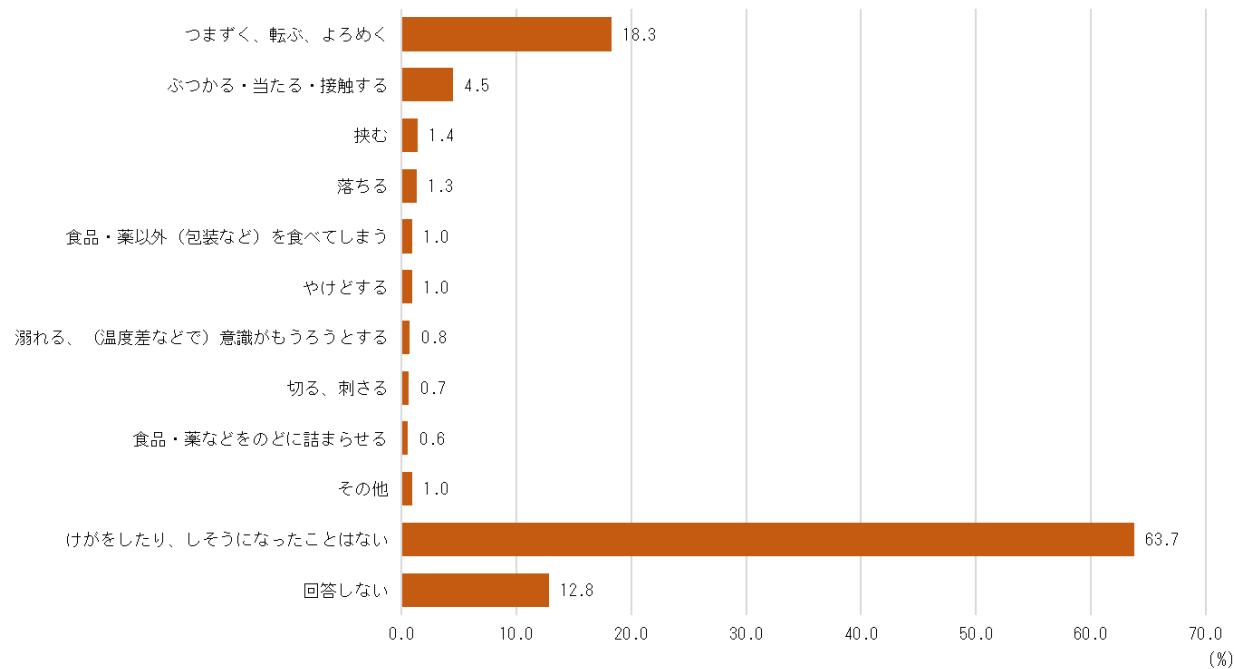


図22 公共交通機関利用時においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑯ 店舗商業施設

店舗商業施設において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(24.2%)であった(図23)。

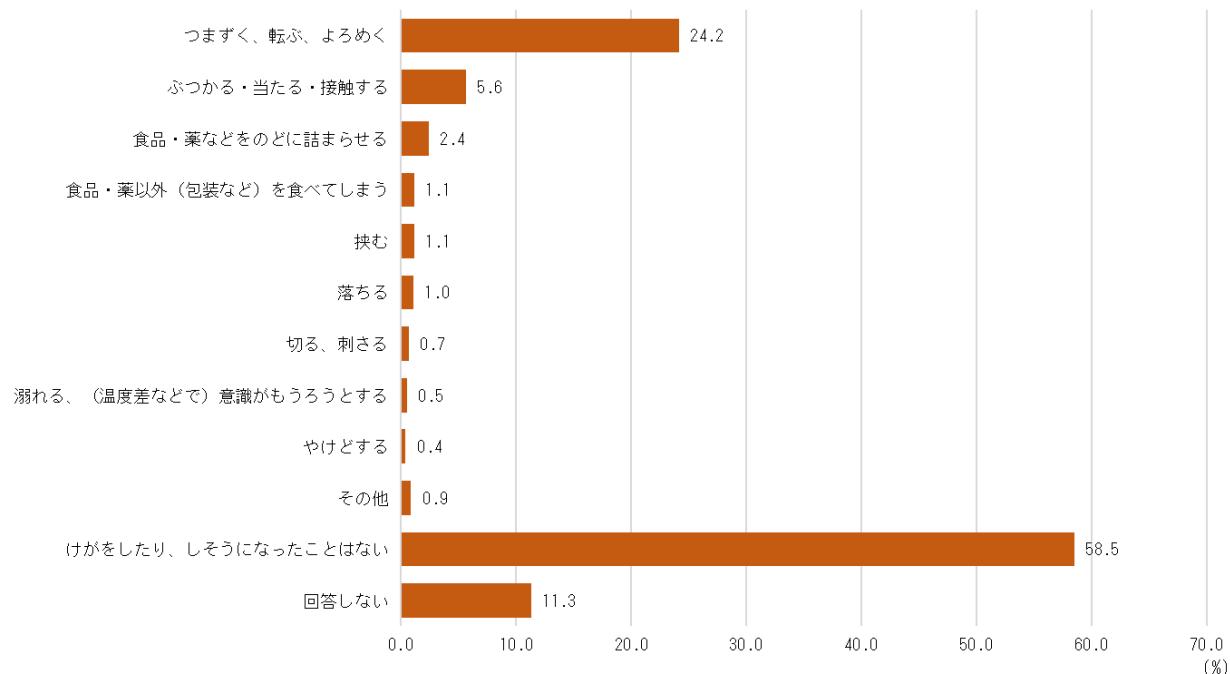


図23 店舗商業施設においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

⑯ 病院

病院において、けがをした、またはしそうになった経験で最も多いのは、つまずく、転ぶ、よろめく(27.6%)であった(図24)。

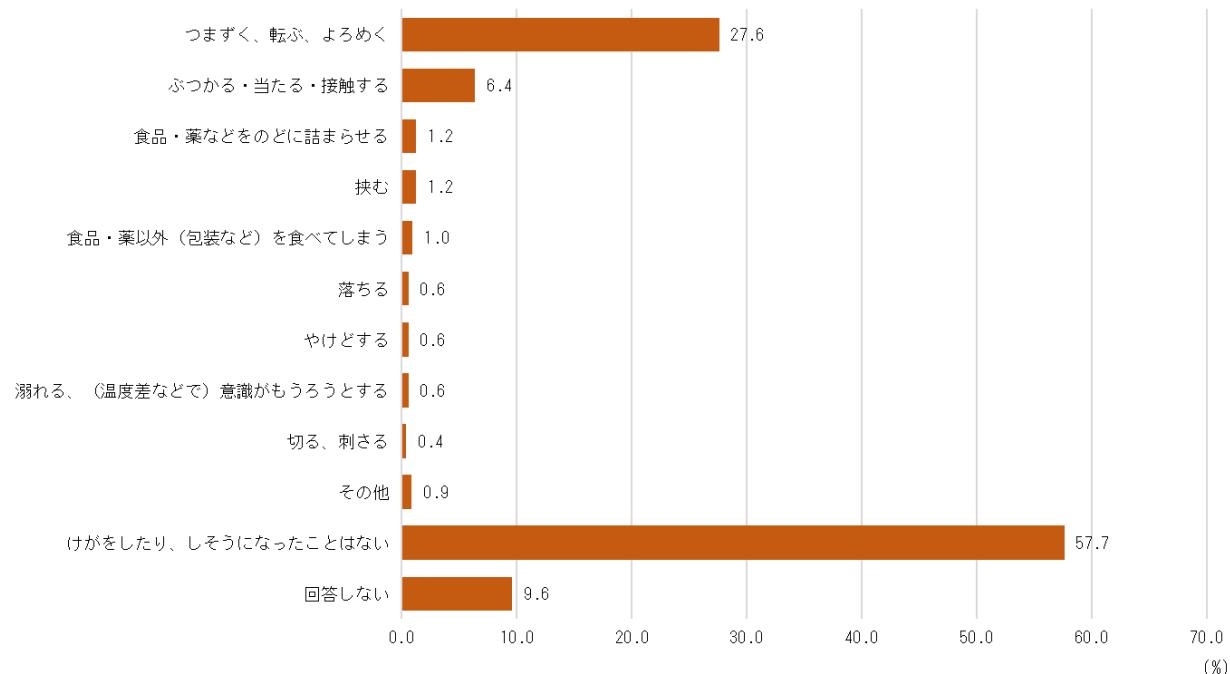


図24 病院においてけがをした、またはしそうになった経験【n=1051】

(3) けがをしたり、しそうになったときの結果（それぞれ複数選択可）

（問2¹²において、「つまずく、転ぶ、よろめく」、「落ちる」、「ぶつかる・当たる・接触する」を選択した方のみ回答）

① つまずく、転ぶ、よろめく

けがをしたり、しそうになったときの結果は、打撲が最も多くなり（43.9%）、次いで擦り傷（32.1%）、骨折（30.7%）であった（図25）。

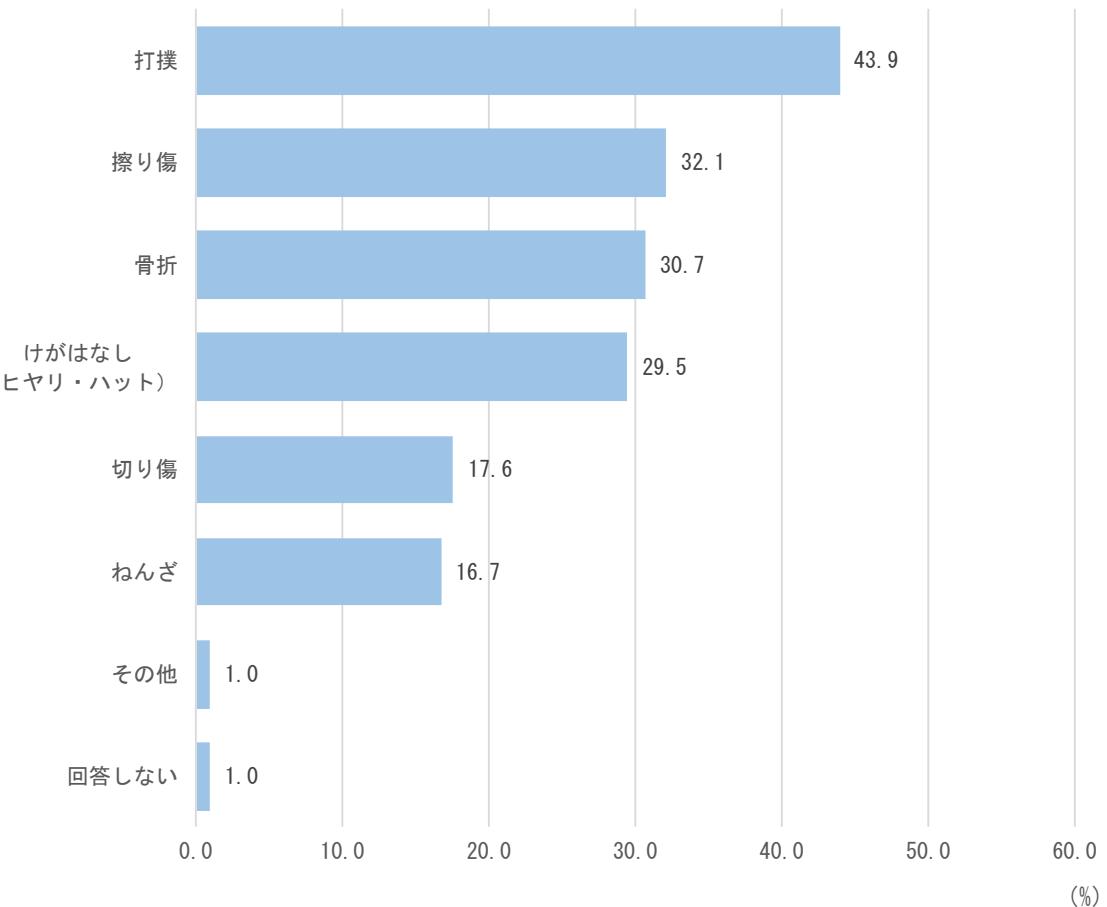


図25 けがをしたり、しそうになったときの結果
(つまずく、転ぶ、よろめく) 【n=831】

¹² 問の内容については、参考資料の2.アンケート調査票を参照。

② 落ちる

けがをしたり、しそうになったときの結果は、打撲が最も多くなり(49.2%)、次いでけがはなし(23.0%)、ねんざ(21.9%)、擦り傷(19.8%)であった(図26)。

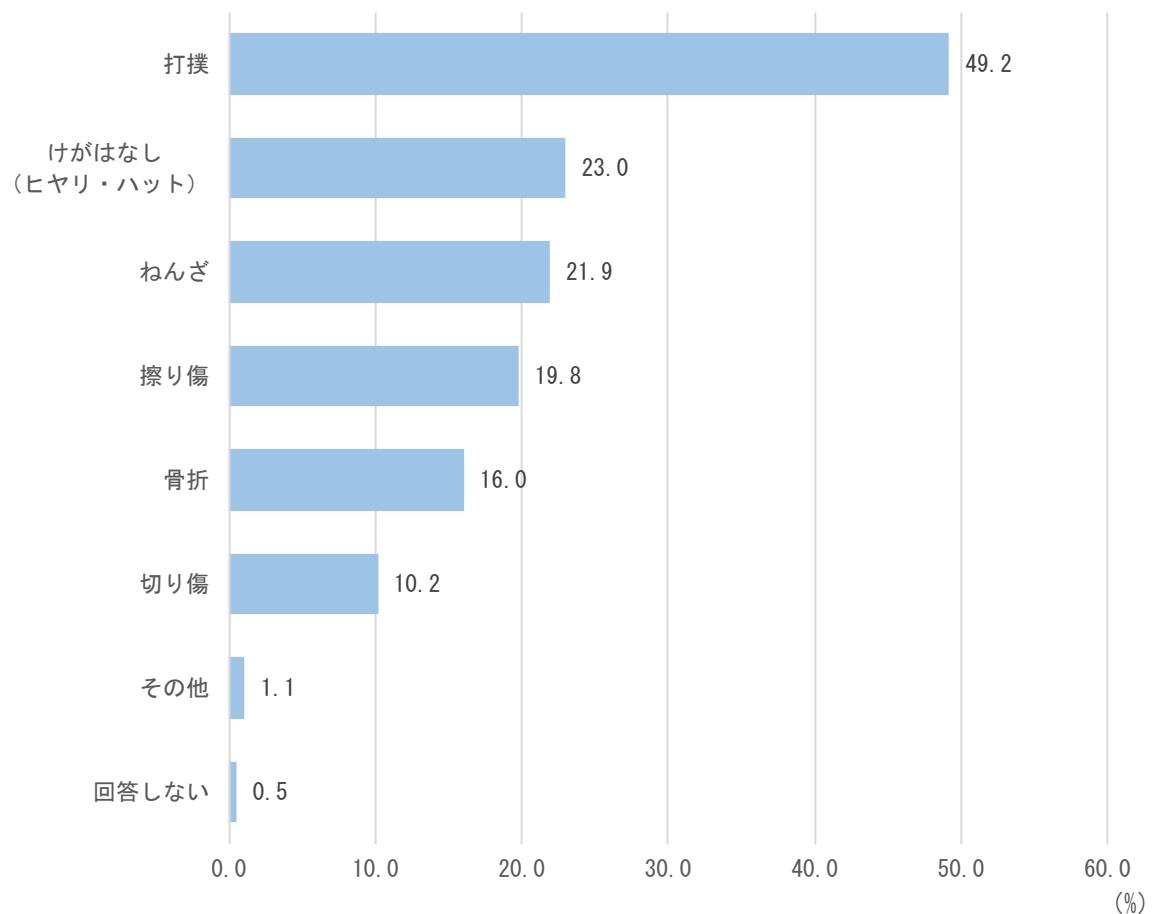


図26 けがをしたり、しそうになったときの結果(落ちる)【n=187】

③ ぶつかる・当たる・接触する

けがをしたり、しそうになったときの結果は、打撲が最も多くなり(51.3%)、次いで擦り傷(36.8%)、けがはなし(26.1%)、切り傷(19.7%)であった(図27)。

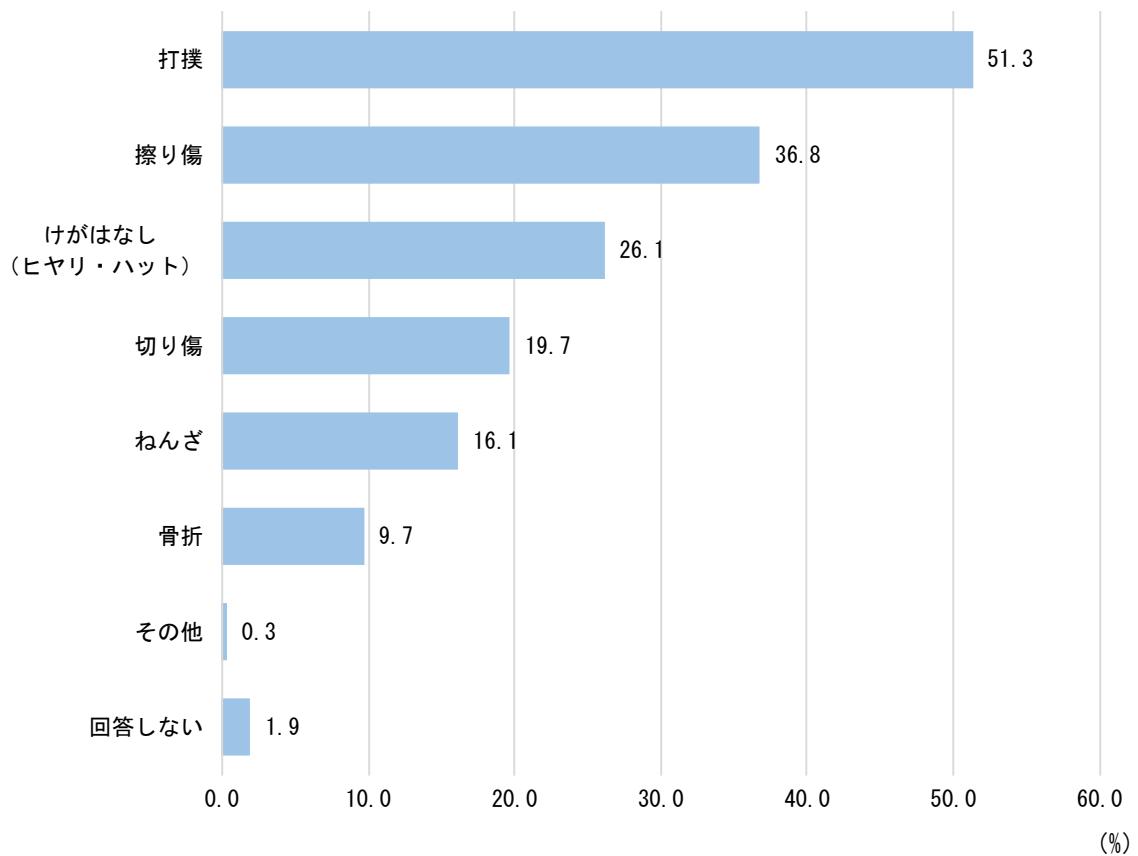


図27 けがをしたり、しそうになったときの結果

(ぶつかる・当たる・接触する)【n=310】

「骨折」について、消費者庁¹³によれば、厚生労働省「国民生活基礎調査」(令和元年)の結果として、高齢者の介護が必要となった原因として、「骨折・転倒」は、「認知症」、「脳血管疾患(脳卒中)」、「高齢による衰弱」に次いで4番目に多い(13.0%)、としている。骨折をすることで、比較的健康な高齢者も介護が必要になってしまうなど、健康状態を大きく悪化してしまうリスクの高さがうかがえるものである。

¹³ 消費者庁「毎日が#転倒予防の日～できることから転倒予防の取り組みを行いましょう～」

https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_safety/caution/caution_055/assets/consumer_safety_cms205_211005_02.pdf (令和6年1月24日最終閲覧)

(4) 転倒したり、しそうになったときの状況（複数選択可）

（問3で「つまずく、転ぶ、よろめく」、「落ちる」を選択した方のみ回答）

転倒したり、しそうになったときの状況において、最も多かったのは段差につまずいたとき（67.1%）で、次いで立ち上がったとき（46.8%）であった（図28）。

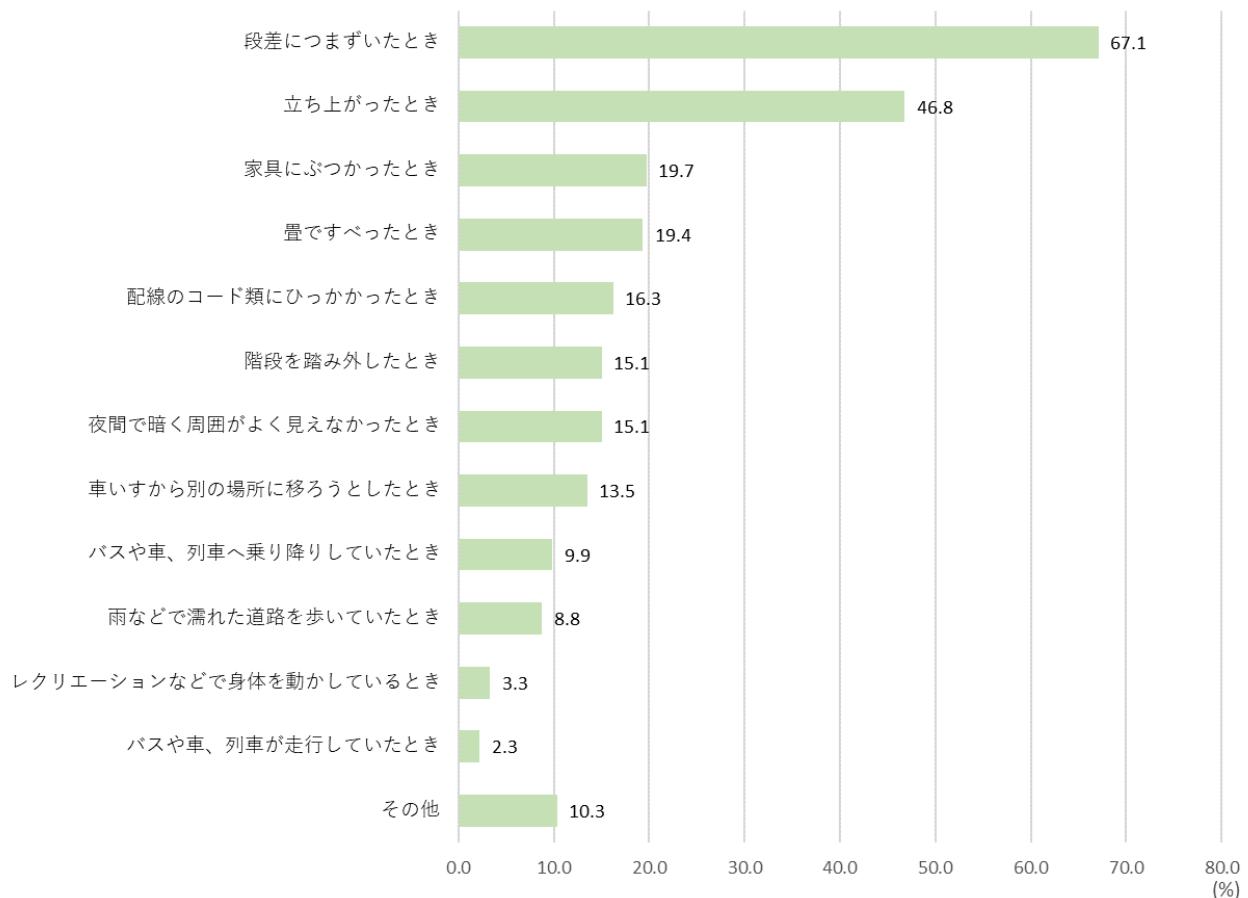


図28 転倒したり、しそうになったときの状況【n=842】

(5) デイサービス利用において、けがをした、またはしそうになった経験（複数選択可）

（デイサービスを利用している、していた方のみ回答）

けがをしたり、しそうになった経験で最も多かったのは、「つまずく、転ぶ、よろめく」（44.5%）で、次いで「ぶつかる・当たる・接触する」（18.0%）であった（図29）。

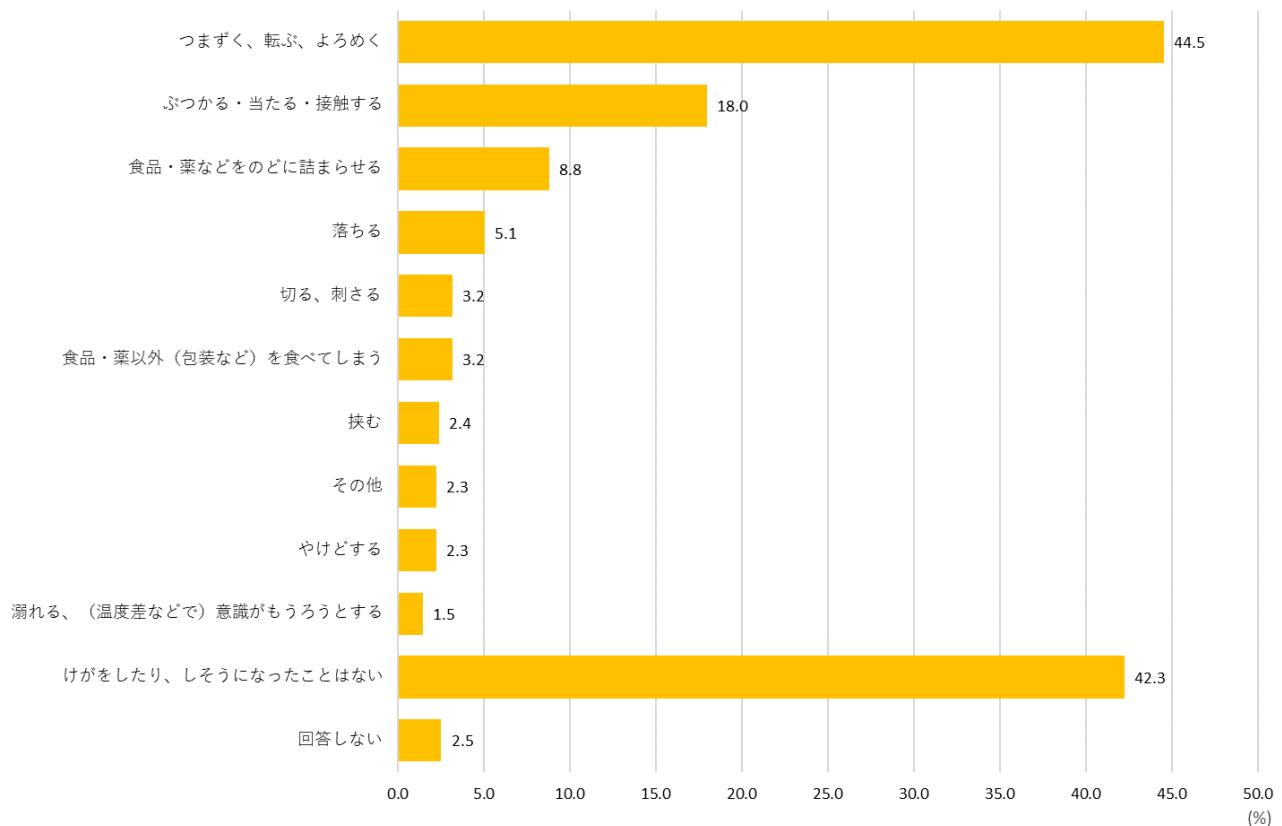


図29 デイサービス利用中にけがをしたり、しそうになった経験【n=750】

(6) デイサービス利用中だけが等を知ったきっかけ

デイサービス利用中にだけがをしたり、またはしそうになったとき、それを知ったきっかけで最も多かったのは施設からの連絡（54.6%）であった（図30）。

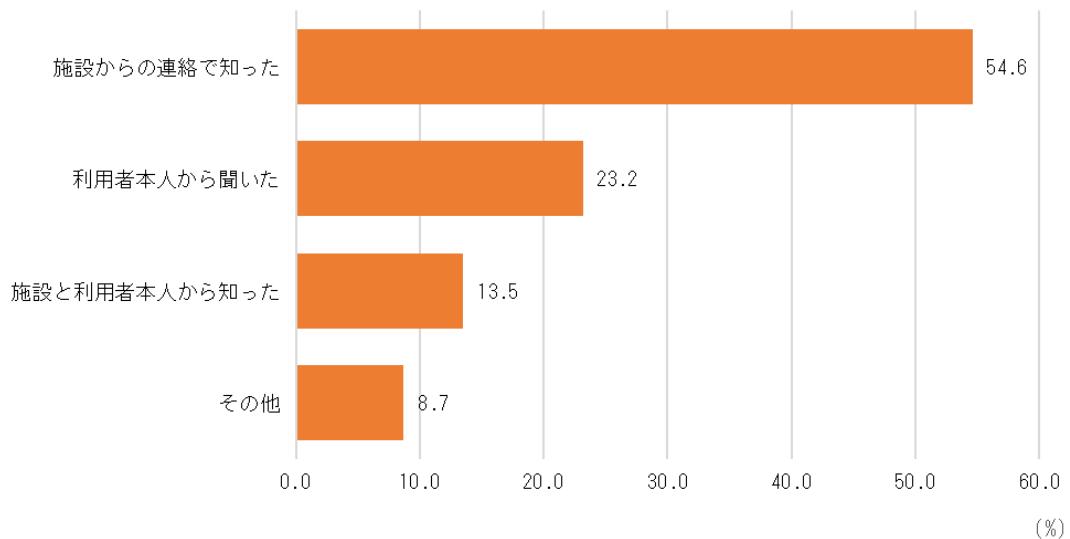


図30 デイサービス利用中だけが等を知ったきっかけ【n=414】

(7) 通院や入院が必要となった事故に関する具体的な事例(自由回答)

具体的な事例（一部抜粋）

① 段差につまずいたとき

- ・自宅内でベッドから起き上がってトイレに行こうとしたとき、ほんのわずかな段差につまずいて転倒し足首骨折。
- ・寝室から廊下に出るときに、ドアのちょっとした段差につまずいてしまい転んだが、手をついたため大事には至らず、膝を擦りむいただけで済んだ。
- ・玄関の段差でつまずき、とっさに手をつき左上腕部を骨折した。
- ・ウォーキング中に歩道の段差（ブロックのズレ）につまずいて転倒、肘と膝を骨折し手術入院した。
- ・駐車場の車止めに足を取られて骨折して入院した。

② 立ち上ったとき

- ・台所で椅子から立ち上がろうとしたら、お尻がずれて床にお尻をついて尾てい骨が骨折した。
- ・自室でベッドから起きあがろうとして、ベッドから転倒し。腕の肘を強打。肘を骨折して手術入院した。
- ・トイレから立ち上るときにバランスを崩して前のめりに転倒して大腿骨を骨折した。
- ・車椅子から立ち上るとき、股関節にひびが入った。
- ・居間で車いすから滑り落ちて尻餅をついてしまった。

③ 福祉用具使用時

- ・公園の坂道で、杖をつきそこねて前にのめりこみ、こけてしまった。
- ・杖を使って廊下を歩き途中の扉を開けたときに、扉の間に杖が引っかかり転倒した模様（入院）。
- ・電車の踏切で杖が線路の間に挟まり転倒した際、手とひざを打撲した。
- ・居間で車いすから滑り落ちて尻餅をついてしまったが、骨に異常はなく打撲で済んだ。
- ・車イスから落ちて大腿骨を骨折してしまった。

④ デイサービス利用時

- ・デイサービスの車に乗るとき、ステップに足を引っかけ、ステップで足をすりむき救急搬送となつた。
- ・デイサービス施設にて他人の歩行器が通路をふさぎ、つまずき骨折。
- ・デイサービス先でトイレに行こうとして椅子から立ち上がろうとしたときに、お尻から床に落ちたそうです。そしてあばら骨を圧迫骨折しました。

⑤ その他

- ・病院に通院したり、入院した例で多く見られたのが、骨折であった。その原因として最も多くみられたのは転倒であった。

4. ヒアリング調査の概要

ネットアンケート調査だけでは確認できない、要介護者¹⁴の実際の生活について調査するため、徳島県介護支援専門員協会に依頼し、ヒアリング調査を実施した。調査概要については、表2のとおりである。

表2 調査概要（ヒアリング）

調査日	令和6年2月6日（火）
対象者	徳島県介護支援専門員協会に依頼し、協力していただくこととなった介護支援専門員や看護師等
場所	徳島県介護支援専門員協会事務所

5. ヒアリング調査の結果

ネットアンケート調査の結果も踏まえて、要介護者の転倒や食事中の事故について中心にヒアリングを行った。

（1）転倒について

ネットアンケート調査において、「つまずく、転ぶ、よろめく」の回答が多く、また、その結果、骨折の回答も一定程度（30.7%）あったこと等を踏まえて、転倒のリスク等について尋ねると、以下のような意見を聞くことができた。

- 高齢者は一人でいるときに転倒する可能性があるのは大前提として考えており、その上で転ばないようにするにはどうするかを検討している。
- 看護の立場からも、転倒によって骨折のリスクが高まり、寝たきりになる可能性があると考えているので、環境整備は必要かと思う。
- 介護の立場から、立ち上がったり、方向転換したりするときによろけることが多いので、高齢者が立った瞬間から職員が気に掛けるようにしている。
- 高齢者と一緒に他の人がついているか、いないかが大きな違いであり、高齢者が一人になる時間のリスクが高い。対策として、転倒しても大きなけがにしないようにすることと、転倒した後ほったらかしにならないことの2点がポイント。例えば、前者なら高さの低いベッド（超低床ベッドなど）や、周囲に敷くクッション材等の使用が挙げられる。後者なら警備会社やセンサーを用いて、転倒したときに気が付けるようにする。

加えて、自由回答で見られたように、転倒に福祉用具が原因となっていることがあることに関連して、福祉用具については以下の意見を聞くことができた。

- 施設では、理学療法士が福祉用具の杖の高さやじゅうたんの設計を評価することで事前に転倒防止ができる。移動が困難ならば、ポータブルトイレを使用することもある。車いすや歩行器は個人の身体状況等に応じて多様な製品が作られており、評価が難しいのが実情。専門家でないと何が適正か判断するのは難しい。

¹⁴ 厚生労働省「要介護認定に係る法令」

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/nintei/gaiyo4.html

（令和6年2月8日最終閲覧）にもとづく「要介護者」の定義は

- (1) 要介護状態にある65歳以上の者
- (2) 要介護状態にある40歳以上65歳未満の者であって、その要介護状態の原因である身体上又は精神上の障害が加齢に伴って生ずる心身の変化に起因する疾病であって政令で定めるもの（特定疾病）によって生じたものであるが、このうち、高齢者に絞ったヒアリングを行っている。

- 福祉用具が要介護者の手元に行った後にモニタリングできていない。その人にとってふさわしい商品か確認できていない。福祉用具は日常生活を送る上で、自立を支援する重要な役割を果たしているが、用具店の人だけでは、その目的や使用者の体の状態を理解するのが難しい。
- 一方で、ケアマネージャーの観点で言えば、用具を実際に使っている様子を見ないといけないわけではない。
- 消費者は専門家にまかせっきりなところがある。提案された家族も、専門家が推奨した物だからという先入観があり、使用者自身も自分からあまり申し出ることをしない。また、本人のこだわりや慣れもある。
- 在宅の人は望んで福祉用具を借りない。今までのものを変えたくない。器具を使わざるを得ない状況になったから使うというのが実態。

(2) 食事について

ネットアンケート調査において、「居間」、「台所・食堂」では、「食品・薬などをのどに詰まらせる」がそれぞれ 12.5%、10.8% 経験したものとして回答されていた。これを踏まえ、食事中の事故についての対策等を尋ねると、以下のような意見を聞くことができた。

- 在宅介護でも体の位置や動かし方、食品の形状のアドバイスはしている（食品を小さく刻むなど）。誤えんしにくくなるような食事用具等もあるので、パンフレットで紹介したりしている。
- 1日3食ではなく、少量にして複数回の食事をとらせると誤えん防止となる。
- 介護の現場では、昼なら口腔体操・えん下体操を実施。自分自身は実施していないが、氷水を飲むアイスマッサージという対策もあると聞く。
- 排泄頻度を気にするあまり水分摂取をしない高齢者も多く、その状態で食べることで誤えんのリスクが上がる。また、口腔ケアが大切だが、通常の歯科が行うのも大変であり、在宅の方に一人一人行うのはなおさら困難である。
- 病気の急性期には食事形態のレベルを落とすことになるが、そこから段階的にレベルを上げていく必要がある。病院で逆算的に徐々にレベルを上げていければよいが、いきなり帰宅する場合に家でそれを行うのは難しい。

(3) その他

- その他、以下のような意見を聞くことができた。
- 当方では、転倒があれば事故報告書を作成して、早急に家族にも伝える。後になって症状が出てくる場合もあるので、先に伝える。一方で、個人の通いのデイサービス等もあるので、家族に連絡できていないような施設等もあるのかもしれない。
 - 介護の現場で、ヒヤリ・ハットというと、例えば、歩行器で歩く人で膝折れがある人がいれば、膝折れがあるというつもりで介助する。職員が特に注意しているのだがにはつながらない。
 - 身内の不幸等でデイサービスに行かない時期が続くとヒヤリ・ハットが起きやすいように思う。
 - 在宅でもちょっとした体の変化がヒヤリ・ハットの予兆ではある。
 - 在宅の要介護者ではヒヤリ・ハットはあって当たり前と考えているが、それを受けた優先順位を上げて予防につなげられるか、という問題がある。もっと見守りをしてほしい、と家族に言っても、できないことを言えば負担になるだけ。例えば、そういうときに動けるのはケアマネージャーや専門職である。人によっては家族の言うことは聞かなくても外部の人の話なら耳を傾ける、ということもありうる。

6. 調査結果のまとめ

(1) 屋内外でのけが経験について

・ネットアンケート調査の基本情報等

要介護認定を受けている方は平成 18 年度末には 332 万人であったが、令和 3 年度末現在では 497 万人と増加している中で、75 歳以上でかつ要介護認定（1～3）を受けている高齢者と同居しているまたはしていた者を対象として、屋内外及びデイサービス利用中の事故の発生状況についてネットアンケート調査を行った。

回答者の基本情報では、回答者の年齢は 60 歳代が最も多く、39.7%、次いで 50 歳代が多く、32.6% だった。70 歳代以上も 10.2% となり、60 歳代、70 歳以上だけで 49.9% を占めた（図 3 参照）。

回答者と同居している、又は同居していた 75 歳以上の要介護者の性別は男性が 31.4%、女性が 68.6%（図 4 参照）、年齢では、最も多かったのは、90 歳～94 歳で、次いで多いのは 85 歳～89 歳であった（図 5 参照）。要介護者では、要介護 2 が最多となったほか（図 6 参照）、デイサービスの利用については、1051 人のうち 750 人が利用している（図 7 参照）という結果となった。

回答者及び同居している、又は同居していた要介護者の属性等は、ネットアンケート調査の特性によるバイアスの可能性もあるものの、高齢者同士の介護が行われていることがうかがえるほか、その多くがデイサービスを利用していると考えられる。

ネットアンケートの調査の結果、要介護認定を受けている方の身体状況については、「立ち上がりや歩行が不安定で、何らかの支えを必要とする」が 74.2%（図 8 参照）というように高い割合となっていた。もちろん、要介護の方を対象とした調査であることから、日常生活における基本的な動作に一定の困難があることは当然ではあるが、多くの方が身体的に不安定な状況を抱えていることを前提に考える必要がある。

・けが経験

「けがをした、またはしそうになった」経験については、質問で示した屋内、屋外いずれの環境でも、「つまずく、転ぶ、よろめく」の割合が一番高かった。その中でも、屋内において、「居間」では 46.2%（図 9 参照）、「寝室」では 42.3%（図 10 参照）、「廊下」では 40.8%（図 17 参照）、「玄関」では 39.7%（図 14 参照）というように高い割合になっている。令和 4 年度に消費者庁新未来創造戦略本部で実施した「住環境における高齢者の安全等に関する調査」、東京消防庁の救急搬送データなどでも転倒事故が多く発生することは示されており、これは先行調査やデータと合致する内容と言える。

屋外でも「つまずく、転ぶ、よろめく」の経験の割合は一番高かったが、屋外のけがの経験は、屋内の環境と比べると割合は高くない。一番割合の高いけがの経験である「つまずく、転ぶ、よろめく」で見ると、特に「公園」では 16.2%（図 19 参照）や公共交通機関では 18.3%（図 22 参照）となり、比較的少ない結果となった。アンケート調査だけでは分析できないが、要介護高齢者においては外出機会が減り、あるいは外出したとしても介護者がついていることによって、こういった場所での事故件数自体は少ない結果となった可能性がある。逆に言えば、要介護認定を受けた高齢者

においては屋内での事故、あるいは屋外でも自宅に近い場所での事故を減らすよう注意を行うことが重要と考えられる。

・けがの結果

「つまずく、転ぶ、よろめく」、「落ちる」、「ぶつかる・当たる・接触する」については、けがの結果についての質問も行った。いずれの結果においても、「打撲」の割合が高かったが、重大な結果として考えられる「骨折」の割合を見てみると、この3種類の事故いずれかを経験したもしくは経験しそうになったと回答した859人のうち、「骨折」は273人(31.8%)である。特に、「つまずく、転ぶ、よろめく」を経験したと回答した人の中では30.7%(図25参照)であり、「落ちる」を経験したと回答した人の中では「骨折」は16.0%(図26参照)、「ぶつかる・当たる・接触する」を経験したと回答した人の中では「骨折」は9.7%(図27参照)と比較すると割合が高いものであった。前述の通り、骨折をすることで、比較的健康な高齢者も介護が必要になってしまいなど、健康状態を大きく悪化してしまうリスクがある。特に「つまずく、転ぶ、よろめく」事故は、件数が多い事故でありながら、高い割合で骨折につながっており、より重大な結果となりやすい。引き続き、高齢者へ注意を促していくことが必要な事故であると考えられる。

・のどに詰まらせる経験

そのほかの「けがをした、またはしそうになった」経験としては、「居間」、「台所・食堂」では、「食品・薬などをのどに詰まらせる」がそれぞれ12.5%、10.8%(図9、図11参照)という結果となった。消費者庁¹⁵によれば、厚生労働省の「人口動態統計」の結果として、令和4年における「その他の不慮の窒息」のうち「気道閉塞を生じた食物の誤えん」による死亡者数は4696人、このうち4297人が65歳以上の高齢者であり、全体の9割以上と非常に高い割合を占めている。のどに詰まらせるることは死亡事故にもつながるリスクの高い事故であり、高齢者は特に注意が必要な事故といえる。

・まとめ

今回の調査の回答者は、前述のとおり、60歳代、70歳以上でほぼ半数を占める。介護している側も高齢者である場合も多いことを考えられる結果となった。このことから、要介護者だけでなく、その介護をしている同居している家族にとっても、家庭内の転倒など事故のリスクを減らすことは重要と考えられる。

ネットアンケート調査の調査結果を踏まえて実施した、徳島県介護支援専門員協会へのヒアリング調査においては、要介護の高齢者が一人でいるときは転倒のリスクが高いこと、転倒は起こる可能性があることは大前提、との認識のうえで対策を考えていることがうかがわれた。段差対策や手すりなどの転倒しないようにする対策だけでなく、転倒しても重症化しにくいような対策、あるいは

¹⁵ 消費者庁「コラム Vol.5 冬に増加する高齢者の事故に注意!一餅による窒息」

https://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_safety/child/project_001/mail/20231227/ (令和6年1月24日最終閲覧)

は転倒した後にすぐに対処できるようにする対策がある旨の意見が得られた。

また、食事中の誤えん事故などについては、食品の対策だけでなく、食器でできる対策や、口腔ケアの大切さについても意見が得られた。

こうした意見を踏まえると、実際に家庭で対策するのは難しいものもあるが、そのリスクを留意して環境改善など対策を検討しながら生活することは大切だと考えられる。

(2) けが経験の状況について

・ネットアンケート調査結果

ネットアンケート調査では、「つまずく、転ぶ、よろめく」、「落ちる」、「ぶつかる・当たる・接触する」については、けがの結果についての質問も行った。いずれの結果においても、「打撲」の割合が高かったが、重大な結果として考えられる「骨折」の割合を見てみると、「つまずく、転ぶ、よろめく」を経験したと回答した中では30.7%（図25参照）であるところ、「落ちる」を経験したと回答した中では「骨折」は16.0%（図26参照）、「ぶつかる・当たる・接触する」を経験したと回答した中では「骨折」は9.7%（図27参照）であり、「つまずく、転ぶ、よろめく」事故は、件数が多い事故でありながら、より重大な結果となりやすい事故であると考えられる。

「つまずく、転ぶ、よろめく」、「落ちる」と答えた方については、その状況についても質問を行ったところ、「段差につまずいたとき」が最も多かった（図28参照）。より詳細な原因は自由回答からも見て取ることができた。転倒やつまずきに関する回答の中に「ベッドから起き上がってトイレに行こうとしたとき、ほんのわずかな段差で」、「寝室から廊下に出るときに、ドアのちょっとした段差に」、「玄関の段差で」、「歩道の段差（ブロックのズレ）につまずいて」、「駐車場の車止めに足を取られて」というように、あらゆる場所の段差がけがにつながる原因となり得る例が見られる。段差については、令和4年度の「住環境における高齢者の安全等に関する調査」でも、「自宅の設備の問題点、改善したい点」の回答に見られた内容であり、改めて段差については注意が必要であることが示された。

次いで多かった状況の回答が「立ち上がったとき」であった（図28参照）。自由回答からは、「椅子から立ち上がろうとしたら」、「ベッドから起き上がろうとして」、「トイレから立ち上がるとき」、「車椅子から立ち上がるとき」というように、日常生活の中での動きがけがやけがにつながる原因となり得る例が見られた。

上記の観点は日常生活の動きが中心であるが、自由回答では、本来高齢者を支える製品がきっかけとなつたけがやけがをしそうになった経験も見られた。例えば、杖（「杖をつきそこねて」、「扉の間に杖が引っかかり転倒」、「踏切で杖が線路の間に挟まり、転倒した」）や車いす（「車イスから落ちて」、「車いすから滑り落ちて」、「車いすから立つ際に」）があった。

段差など具体的に危険なものや製品がある状況だけでなく、日常的な動きの中だけがにつながっていることがうかがえた。加えて、製品についても通常の安全性だけでなく、高齢者の特性を踏まえた製品や環境の検討が必要であると考えられる。「居間」や「寝室」でのけが、「段差」、「立ち上がり」というキーワードからは、活発に動くというよりも、ごく日常的な動きの中であっても事故経

験につながっていることが示唆された。令和4年度の、高齢者一般を対象とした「住環境における高齢者の安全等に関する調査」では、「階段」、「庭（ベランダを含む）・駐車場」でのけがが多く、製品では「脚立、踏み台」でのけがの経験が多かったが、その点では異なる結果がみられた。今回の調査は75歳以上の要介護者のけがの経験を同居家族等から調査したことから、より日常に近いところで起こるけがの経験についての結果が出てきたとも考えられる。

・ヒアリング調査結果

ヒアリング調査でも、立ち上がりの際の転倒のリスクの高さについての意見が得られたことから、ちょっとした動きの中での転倒には留意することが大切である。そのほか、福祉用具が使用者にとって適切なものを使えていない可能性についての意見が得られた。福祉用具が適切かどうかは一般の人だけでなく、専門家でも判断が難しいと思われることから、すぐに家庭で対策をとるのは難しいが、まずは福祉用具が原因となって事故につながるリスクも認識することが大切であると考える。

（3）デイサービスについて

本調査の回答によれば、要介護1～3の高齢者のうち71.4%（750人）がデイサービスを週1回以上利用しているという結果（図7参照）となり、デイサービスの利用率の高さが見られた。

デイサービス利用時の「けがをした、またはしそうになった」経験を伺うと、「けがをしたり、しそうになったことはない」と回答したのは42.3%で、逆に半数以上で「けがをしたり、しそうになった」経験があると回答している。その中では、やはり「つまずく、転ぶ、よろめく」の割合が高くなっている、全体の44.5%という結果であった（図29参照）。

要介護の高齢者では、デイサービスの利用率が高いが、けがの傾向としては「つまずく、転ぶ、よろめく」が多いことなど、デイサービス以外での日常生活におけるけがの経験と変わらないため、自宅での高齢者の注意喚起はデイサービス含め介護施設等にも参考にできるものとなると考えられる。

加えて、デイサービス利用中、けがをしたり、またはしそうになったとき、それをどのように家族は知ったのかを尋ねたところ、回答は「施設からの連絡で知った」が54.6%であり、「施設と利用者本人から知った」も13.5%となったものの、「利用者本人から聞いた」という回答が23.2%という結果であった（図30参照）。必ずしも施設から家族に連絡が行き届くわけではないことが示唆される結果となった。けがや事故の予防という観点からは、情報共有は重要な要素の一つと考えられるため、施設と家族での情報共有の不足があることは一つの課題と言えるだろう。

7. おわりに

本調査の結果では、要介護認定を受けた高齢者について、特に自宅内で転倒や食品をのどに詰まらせる経験が比較的高い割合でみられる状況が見られた。さらに、転倒については、骨折してしまう割合も高く、重大な被害につながっていることもうかがえた。また、デイサービスにおいても自宅内と同様のけが経験の傾向が見られた。

こうしたリスクを踏まえて、対策を行っていくことが求められる。例えば、自由回答の中では、

「階段に手すりを取り付けたり、段差を無くし転倒しないように気をつけている」、「バリアフリーを施しているので、ほとんどがつまずくことはない」との回答もあり、自宅内、施設内の環境改善、バリアフリーの重要性が示唆された。このように、本調査において自由回答から得られた内容の中には、実際に対策をとって通院や入院がなかったと回答したものもあり、参考とできるものもあった。

高齢者は、一度事故が起こると重篤な状況に陥る危険性が高いため、住み慣れた自宅であってもそのリスクが高いことが本調査で示された。また、高齢者が一人になるときの事故のリスクが高いことからも、自宅は屋外よりも事故につながりやすいと考えられる。また、デイサービスの要介護者の利用割合は高く、その家族にとっても大切な場である。ヒアリング調査においては、介護に携わる専門職の方から実際の取組等も聞くことができたが、サービスに差がでないように、そして利用者がより安心できるように、本調査結果も参考にされたい。高齢者自身やその家族等の支援者、あるいはデイサービス施設などが積極的に事故防止について意識し、事故が起きる前に少しづつでも問題点を改善し、環境改善や対策に取り組むことが重要である。本調査結果がそのきっかけとなることを期待する。

最後に、調査にあたり、御多忙にも関わらず、快くヒアリング調査に御協力いただいた徳島県介護支援専門員協会の皆様に感謝申し上げる。